書　評

千葉県富津市飯野陣屋，稲荷口遺跡調査報告：稲荷口遺跡調査会(代表　椙山林継)編集発行，1982年，B５判13頁

調査概報遠江新居宿御殿跡遺跡：新居町教育委員会編集発行，1984年，B５判本文25頁，図版12頁

近年は考古学の研究対象が拡大され，歴史時代，それも中世，近世についても調査がなされてきた。この２篇は一つは陣屋，一つは御殿と，発掘調査としては恐らくは，それぞれの分野のさきがけをなすものと思われるので紹介したい。もっとも御殿についての発掘調査の事例として，既に青砥御殿（東京都葛飾区）のものがあるが，これは中世の葛西城址が家康によって御殿にされたもので，報告書が「葛西城址調査報告」と題するごとく，調査の重点も城の方に置かれている。御殿そのものを主題とするものとしては，今回の新居御殿の報告が最初であろう。

飯野陣屋は千葉県富津市にあり，保科氏２万石の陣屋である。建物こそ残っていないが，四周の土塁と堀がほとんど完全に残っているのは稀に見る所で，旧版の地形図，富津（５万分１，2.5万分１共）に明記されて居り，御屋敷と注記されている。

今回発掘されたのは二の丸の一部に当り，藩士大出家の屋敷址である。遺構，遺物は全く確認できず，発掘報告（笹生衛氏執筆）は土層断面図とその解説だけで２ページで終っている。発掘報告書で遺構，遺物皆無というのは恐らく例がないだろうし，担当者の落胆は想像に余るものと思われ，それでも報告書を作製せねばならないことも苦しいことだったろう。当時の武家屋敷は庭や家庭菜園に宛てられた部分が広いので，その箇所に当るのかもしれない。

次いで「飯野陣屋と保科家」と題し，藩の成立，歴代の事績，領地の変遷，陣屋の状況につき述べられ参考になる（八田英夫氏執筆)。

巻頭に陣屋の古図２枚，それに空中写真と現在の５千分１図が掲げられ，これ等をもとに牛房茂行氏がまとめられた飯野陣屋概念図が収められている。紹介者にとって一番有難かったのは以上の諸図で，これ等を現地と照合する時，かなり明確に当時の景観を推察することができる。

要するに本報告書では発掘成果では見るべきものがなく，他の記事や図が役に立つということになるが，発掘の報告を出す必要から貴重な古図や解説を刊行し得たということにもなろう。今回は発掘地点を自由に選べない事情で止むを得なかったと思われるが，他日場所を変えて発掘調査の成果をあげられるよう期待して止まない。

なおこれは陣屋の報告書で，陣屋町についてはふれられていない。実は飯野では陣屋はあっても陣屋町は存在しなかったのである。拙論（「一万石大名の城下町」新地理10―２等）で零細藩の陣屋所在地には，町というにふさわしくないものがあることを述べた。飯野は２万石なので拙論の対象にはしなかったが，町場というのは全く形成されていないのである。２万石といえば伊勢崎，人吉，大多喜等と同石高でかなりの規模の城下町（陣屋町）を持っている場合が多い。飯野に町場が成立しなかったことについては，何か理由がなければならない。本報告書の記事（９ページ）によれば２万石の内，飯野周辺は約３千石，残り1.7万石は関西にあったという。要するに飯野は２万石の藩領の中心ではなかったということで，町場不成立の要因はここに求められるべきであろう。

新居は東海道53次の一つであると共に，関所所在地として余りにも有名である。近世初頭ここに御殿が設けられ，徳川将軍上洛の際に利用された。

1980年に新居町史編さん会議の席で，交通史研究者として著名な渡辺和敏委員（愛知大助教授）により御殿跡発掘の必要が述べられたが，その際に機が熟せずと見送られ，1983年秋に養魚場になっていた御殿址が砂の採取場に転ずることになったので，同年11月に緊急発掘を行った報告が本書である。

1.　はじめに　2.　位置と地形　3.　調査の経過　4.　遺構　5.　遺物　6.　考古学的にみた御殿跡遺跡　7.　文献よりみた東海道新居宿の御殿について，の７章から成り，５章は後藤建一氏（湖西市教育委員会)，７章は渡辺和敏氏，他は向坂鋼二氏(浜松市博物館館長）の執筆である。現地の大部分は養魚池になっているので，池間の土堤の所で南北50m，これと十字に交わる東西30m（いずれも幅５m）が発掘された。

遺構としては石組と杭列が検出され，石組は「もと石垣だったものが壊されたものと思われる」とし，「南面と東面を石垣とした土居がＦ区で曲っていたと推定することができそう」とされている。伊豆の

三島御殿址の古図（三島郷土館蔵）に御殿周囲の石垣が図示されていることも想起され，興味深い報告である。

遺物としては陶磁器がもっとも多く，他に金属品として貨幣，煙管，収納用具の金具，木製品として漆器，下駄，箸，櫛，建築資材等，その他として硯，墨書土器，木札等の出土が報ぜられている。

陶磁器については愛知県陶磁資料館学芸員井上喜久男氏の鑑定助言を求め，用途別と産地別（伊万里，唐津，美濃，中馬街道筋，常滑）に分類記述される。御殿跡であるから将軍等の使用に供された高級美術品から，在勤者の日常使用した大衆品まであった筈であるが，この点の記述を明確にして欲しかったし，陶磁器入手について農民・町人関係の遺跡でない特殊性に着目されているものの，具体的でないのが残念である。

文献による考察の章では，近世交通史上における御殿の意義と重要性を手際よく概説され，古図を示して津浪による移転以前の関所，宿場，御殿の配置を明らかにし，更に元禄15年の検地帳に見える御殿跡，御殿に使用される材木を伊那谷から出していること，家茂の上洛に当り先祖が御殿の払下げを受けたことを由緒として述べて，新居宿本陣が利用を願っていること等，興味深い史実が述べられている。

以上御殿に関するはじめての発掘成果にふさわしい貴重な報告といえよう。向坂氏が「私にとって御殿跡は馴じみが薄かったし，……正直いってあまり乗り気がしなかった」と告白されているように，御殿というものについての一般の理解と関心がいまだ薄い現状において，新居の御殿址が他に先きがけて発掘調査されたということは，渡辺和敏氏の熱心な提唱によるものというべく，渡辺氏に敬意を表したい。　（中島義一）

Guelke, L.: Historical Understanding in Geography: An Idealist Approach（地理学における歴史学的理解—観念主義の接近法）X＋109 p, 1982, Cambridge Univ. Press, £15

Guelke の観念主義（歴史）地理学の紹介はすでに幾つか書かれている（文献1•3•4•5•6）しかし彼の主張の基調，すなわち彼が折衷主義者であることの含意はあまり論ぜられていない。ここに紹介する Guelke の著作は，従来の主張をとりまとめたもので特に新しい論点を含むものではない。しかし，用語を改めるなどの工夫により論旨はさらに明解にまた単純になり，その結果，折衷主義者たる特徴とその可能性もしくは限界とが一層明らかになっていると思われる。そこで，まず本書の概要を述べたあと，主に Collingwood との対比で Guelke の観念主義の方法の特徴を考えてみたい。本書は，全体の要約である序論のほかに六つの章からなる。

第1章：歴史地理学における，歴史についての不適切な概念。

本章の中心問題は，単なる過去と歴史的過去との区別である。両者を同一視する見方を，Guelke は "temporal concept of history"〔歴史の時間的観念，すなわち歴史を単なる時間（の流れ）として観念すること〕と呼んで批判する。彼の考えでは，全ての過去の事象が歴史を構成する訳ではないこと（つまり歴史研究において事実の選択が必要なこと）は，実際上の問題ではなくて原理上の問題である。歴史は人間が自己の社会を自ら生成変化（発展）させてきた過程であり，自然の斉一的な時間的変化と区別される。そしてこの人間の創造性において能動的役割を果しているのが，行為の背後にある（或いは行為に表現された）思考である。より具体的に言えば，ある状況（またはその変化）のもとで人（々）がその状況ないしは変化をどう捉えどう対処しようとしたか，ということが歴史を作ってきたのである。歴史地理学は，歴史のなかでも特に大地の上に展開した人間の活動（たとえば聚落や土地利用など）に関心をもつが，原理的には歴史学の他の部門と違わない。

このような規準から見ると，これまでの歴史地理学の主方向を作ってきた Hartshorne・Sauer・Darby・Clark らの議論は，すべて歴史の時間的観念に拠っているので歴史地理学に堅固な基礎を与えることができない。またこれらの伝統的方向を打破しようとした J. Wright やその他の人々も，歴史の根本である「思考」に到達しなかった。

第2章：合理的理解

行為の歴史的意味は観念の関数である。それゆえ合理的理解は次の二つの部分からなる：一つは行為者の意図を確定すること，もう一つは行為者の理論を発見すること。両者のなかでも後者がより重要である。ここに理論とは，行為者が状況を捉え，かつそれに対処する際に依拠する準拠枠である。すなわち何を信じているかが問題であって何故そう信じて